

## ■はじめに

70 回を迎える正倉院展に、今年も行ってきました。日曜日の夕方に行ったのですが、子どもの数が例年より多かったように思います。もちろん、子どもだけで行くという雰囲気のある場所ではありませんので、親子連れで来ているのですが、その姿を見て、「いいな。嬉しいな。」と思いながら、鑑賞させていただきました。

正倉院展については、「開館前に奈良市の子どもだけの時間をつくってもらえないだろうか」等、様々な交渉をしてきました。しかし、改めてたくさんいた子どもの姿を見て



いると、そうしたことは必要ないのではないかと思いました。訪れた大人が真剣に宝物を見ている姿の中に子どもが混じって、その大人がどのような思いをもって見ているのかということについて、子どもとして思いを馳せればいい、何事も子どもを優先することが子どものためになるとは限らないのではないかと思ったのです。子どもが大人の姿を見て、大人の熱気を感じながら時代をタイムスリップしていくという正倉院展独特の空間や時間が、子どもの原体験になればいいと思いました。そして、その原体験が、大人になったとき、何かの心の柱になっていくように考えます。

## ■奈良の子どもたちのアイデンティティを育む

正倉院展での子どもの様子を見ながら、先日開催された総合教育会議で、教育委員から出てきた意見を思い出しました。

10 年後 20 年後の社会について考えると、グローバル化というのは避けて通れないだろうと思う。一方で、「グローバル」が広がるということは、一方で「ローカル」、地域がもっと重要になってくる。「グローバル・アンド・ローカル」という考え方がベースにあって、様々な取組をしていくことがいいのではないかと思う。

たしかに、今、「グローバル」ということで、世界に目を向けて日本を飛び出していこうというところが大事にされています。一方で、地域がもっと重要に見える、という視点もいるのではないかと、「グローバル・アンド・ローカル」という言い方をされました。

校長会では、文部科学省が出した「Society5.0 に向けた人材育成」や、経済産業省の「未来の学校と EdTech」研究会の提言について、10 年後、20 年後の社会を生きる子どもに必要な教育を語ってきました。しかし、一方では、奈良で学ぶことの価値観を子ども達にしっかりと根付かせていく必要があると考えています。

奈良には、「本物」があると思います。正倉院の宝物も、その一つでしょう。長い時間をかけ、その中で継承されてきたということに思いを馳せると、奈良は、本当に稀有な遺産をたくさんもつ他に類のないまちだと思います。そして、子どもたちが、学ぶことの深さを知りうるまちなのだと思います。

こうした体験や学びをすることは、奈良の子どもたちのアイデンティティの育成につながります。英語やICT機器を使って、海外の人に「自分は何者だ」ということを紹介するとき、どこから来て、どんな文化を持っているか、どんな学びをしてきたか、どんな考え方をしているのかということを手を相手にしっかり伝えないと国際社会では通用しないとよく言われます。だからこそ、「自分は何者だ」ということをもてる営みが子どもたちにほしいと思います。

### ■「奈良市総合教育会議」で語られた3つのキーワード

総合教育会議は、平成27年4月の地方教育行政法の改正により、市長と教育委員会が、教育の大きな方向性を議論する場として法律で定められました。

例年、協議テーマを決めて話し合いをしますが、今年のテーマは「一条高等学校の将来構想について」でした。一条高等学校の今後の教育の在り方・方向性について、市長と教育委員が協議を行いました。その中で、奈良



市の教育全体にかかわるキーワードとして、次のような言葉が出てきました。

- ・ STEM 教育
- ・ SSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール)
- ・ 中高一貫教育

これからの奈良市の教育の方向性がこの中に入っていると思いますので、この大きな3つの柱について、説明しておきたいと思います。

一つ目のキーワードはSTEM教育（ステム教育）です。

これは、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリング、マスマティクスの頭文字をとった、科学・技術・工学・数学、この4つの分野の教育に力を注いでいき、これからのグローバル社会、IT社会に適応した人材育成を目指した教育です。

もともと、STEM教育は、1990年代にアメリカが国際競争力を高めるために、科学技術人材の育成を目指したことから始まり、21世紀に入ると、世界に広まっていったものです。もちろん、日本でも、世界に負けない競争力をつけるために言われだしました。

STEM教育	
S	Science (科学)
T	Technology (技術)
E	Engineering (工学)
M	Mathematics (数学)
これからのグローバル社会、 IT社会に適応した人材育成を目指した教育	
A	Arts (芸術、リベラル・アーツ)

一条高等学校では、このSTEM教育に「Arts（アーツ）」いわゆる芸術を取りこんだ、「Arts STEM」という表現をして、取り組もうとしています。

昨年9月に設立された「日本STEM教育学会」の設立記念シンポジウムでは、中央教育審議会会長でもあった安西祐一郎氏が基調講演をされました。講演の中で安西氏は、「変革が求められる社会になっていき、これから子どもたちが歩む先は不透明であり、今までであったものが積みあがっていくということではなく、新しいものを創造していく社会が始まっていく。そのような社会に出て、日本の子どもたちが世界の仲間達と肩を並べて仕事することになっていく。」と述べられ、その時に必要なポイントとして、次の4点をあげられました。

1. 現実の対象に関心と疑問を持ち、対象の構造と機能を理解し、自らの問題として設定し、その解決に挑戦する力を養う教育。
2. 論旨を明確にして思考し、まとめ、相手の立場を考慮しながら表現する力を養う教育。
3. 複雑・あいまい・観測困難な対象の構造と機能を、自分で理解する力を養う教育。
4. 問題を自分で正しく設定し、それを解決するために自分から努力する力を養う教育。

また、「子どもが楽しく学べる場」を創ることが大事だと語られ、実現するための手段として、様々な教科・科目を横断的に捉えて実社会の問題解決を行うSTEM教育が、最も有効だと述べられています。

先行きの見えない社会で何か新しいものを創り上げていくという時には、私は、「論理的な思考の積み上げ」が求められていくと考えます。基本に「論理的な思考」が必要なのです。一条高等学校は、そこに「Arts」を加え、理系の考え方に「芸術」をつけた「Arts STEM」という言い方をして、これから取組を進めようとしています。

二つ目のキーワードは、SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）です。SSHとは、文部科学省が平成14年度より行っているもので、将来の国際的な科学技術関係の人材を育成するために先進的な理数教育を実施する高等学校等を支援する事業です。

### SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）

文部科学省が平成14年度より行っている事業  
将来の国際的な科学技術関係の人材を育成するために先進的な理数教育を実施する高等学校等を支援する事業

学習指導要領によらないカリキュラムの開発や実践、課題研究の推進や観察・実験等を通じた体験的な学習を行う学校が指定される

**小中学校から一貫して教育を積み上げる  
幼児教育の段階から科学的な目を培う  
奈良市全体の教育の在り方**

文部科学省の指定を受けた学校が、5年間、学習指導要領によらないカリキュラムの開発や実践、課題研究の推進や観察・実験等を通じた体験的な学習を行うというものです。県内では、奈良高校や青翔高校、西大和学園、奈良学園、女子大付属中等教育学校が、すでに指定を受け、取り組んでいます。そのSSHの申請に向け、今、一条高等学校で準備を進めています。

このSSHの申請は、学校の設置者が行うことになっているので、奈良市教育委員会が申請を行っていきます。単に一条高等学校で先進的な理数教育をするということに留まらず、場合によっては幼児教育も視野に入れ、小中学校から、目指す高等学校の教育にどのようにつながっていくのかということを示したいと考えています。「小中学校から一貫して教育を積み上げていく」、しかもそれは、単なる理数教育を行うということではなく、「科学的な目をどのように培っているか」ということです。新しい時代・新しい社会を切り拓くために必要な論理的思考及びその積み上げが求められているのです。奈良市全体の教育の在り方を問うていこうと思っています。

「科学的な目」や「科学的・論理的な思考力」については、京都産業大学の西川信廣教授が次のように述べられています。

今はほとんどの子どもが高校に進学するのだから、教育は18歳から逆向きに設計しなければならない。中学校3年生で理科嫌い・数学嫌いを減らすことです。中学校3年生で「数学が嫌い。理科が嫌い。だから高校では数学・物理を勉強しないで大学は文系に行く。」というのであれば、それは「人生半分しか選択肢がない」ということです。数学も物理もできる。理系も文系も選択できる中で文学部へ行く。物理も好きだけど、芸術を学びたい。それっていいじゃないですか。「理科嫌い」「数学嫌い」をつくらない教育をオース それが大事です

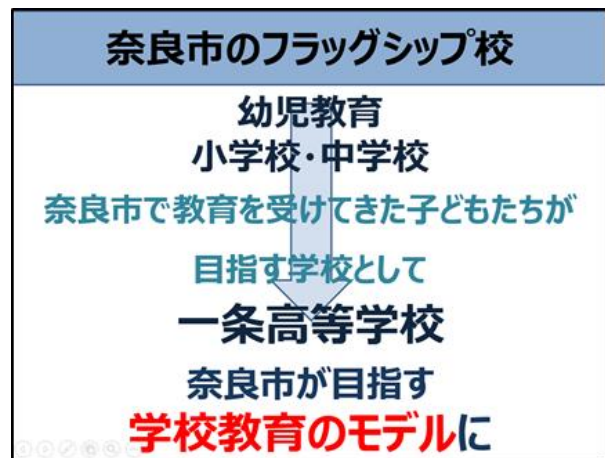
一条高等学校でもSSHをめざし、全ての生徒に特色ある理数教育を進めていくという方向性を示していきたいと思います。また、それは、一条高等学校だけが目指すところではなく、奈良市には、幼稚園、保育所、子ども園を含め、小学校、中学校がありますので、その姿を奈良市の一貫した「義務教育で目指す姿」として一緒に描いていけたらと思います。

三つ目のキーワードは、**中高一貫教育**です。前述の総合教育会議の中で、一条高等学校がSTEM教育やSSHの取組を進めて行くことを一条高等学校長に説明していただきました。そのことを受けて、教育委員から次のような意見が出ました。

- ・シンボリックな教育のモデルをつくっていくとなると、それが3年間でできるのかということを感じる。そうすれば、中高一貫の中学校から6年間という中期的な枠の中で教育をしっかりとしていければ、本当に良い教育が実現できるのではないか。
- ・大学入試改革が変わり、「高大接続」と言われた。高校の学びが変われば、当然、義務教育での学びも変わってくると思う。そうすると、中学校での授業スタイルや教育内容も変わってくる。それに先駆けて、一条高校が中学校の段階から中高6年間一貫して、社会と教室をつなぐ学びを実践していくモデル校になっていく。中高一貫というのも、一つのスクール・アイデンティティだと思う。

これは、一条高等学校を奈良市全体の教育の中でどのように捉えるのか、ということだろうと思います。私は、奈良市に一つしかない市立の高等学校なので、「一条高校の出口の姿が、奈良市の教育の出口の姿である」と捉え、「目指すべき学校」としての姿にしていきたいのです。

一条高等学校は、その下につながっている奈良市の小中学校の「フラッグシップ校」に名実共になっていくと思います。一条高等学校の下に奈良市立の中学校があり、その下に小学校、幼児教育もあるので、高等学校の学びまでつながっていくような一連性をもちたいと考えています。奈良市が目指す教育は、このようなところでも実現できたらと思っています。



### ■同じ方向を向いて教育を

総合教育会議で議論された内容ですので、これは、「一条高等学校の話」ということでなく、奈良市が目指す教育の方向性だと受け止めていただきたいと思います。奈良市としての方向性を示しているものであると理解し、共有していただきたいと思います。

また、こうした議論を深めていく機会があると思いますが、しっかりと心に留めて、同じ方向を向いて進めていただければと思います。